

# R・タゴール「ユニティの教育」に関する考察

— 生の全体性を育むための視座形成にむけて —

学校教育専攻  
総合学習開発コース  
砂川靖夫

指導教官 山崎洋子

## 1 問題の所在と研究の目的・方法

「総合的な学習の時間」の導入によって引き起こされた混乱は、1980年代末以降、教育観の転換が叫ばれ続けてきたにもかかわらず、それがスローガンに留まり、実践を視野に入れた確かな教育理論の構築には未だ至っていない、ということの現れとみることができよう。このような状況下にあつて急務とされるのは、教育実践を支えることのできる理論枠組みを見出すことではないだろうか。そして、そのためには教育全体に対して総合的な検討を行うことができるような視座が必要となる。

そこで着目したいのは、「詩聖」と称される世界的に著名なインドの詩人ラビンドラナート・タゴール (Rabindranath Tagore 1861-1941) である。彼は1913年に東洋初のノーベル賞を受賞(文学賞)した人物であるが、このような彼の功績は、40歳の時に、シャンティニケタン (Santiniketan) の地に修養道場を創立し、その私塾を国立の国際大学にまで育て上げた教育実践者としての生き方に裏打ちされている。その彼が掲げた理論は、全ての事物を除外することなく統合・調和させる「ユニティの教育」として集約することができるが、そこには人間を豊かに成長・発達させるために不可欠な教育の根本理念が横たわっている。それゆえ、「ユニティの教育」に対して新たな視角から解釈・考察することによって、「総合的な学習」のみならず、

教育という営みそのものを根源的に問い直すための視座が獲得され、同時に、教育実践を支える理論枠組みを作り上げる知見が得られるように思われる。

本研究は、①タゴールの教育実践の根本原理である「ユニティの教育」について、まず、その形成基盤を明らかにし、次に、その思想的基盤について考察を加え、②「ユニティの教育」を「生の全体性を育む」ための理論枠組みとして解釈し、現代学校教育への援用可能性を探ることを目的とする。研究の方法は文献研究であり、タゴールの講演に基づいた論文集『人間の宗教』を中心文献とする。タゴール思想の形成基盤を概観するにあたっては、彼の生涯全体がその考察対象の時期となるが、彼の思想的基盤の解明に際しては、彼が海外での講演活動を積極的に展開し始めた1912年から『人間の宗教』を完成させた1931年までを中心とする。

## 2 研究の概要

第1章では、タゴール思想の形成基盤について解明を行った。まず、祖父ダルカナートと父デンドラナートに社会活動家ラムモホン・ライを加えた三人の存在が、伝統的なインドの世界観と近代インドのモダンな価値観との融合を志向する彼の多様な思想を形成する基盤となったことを明らかにした。次に、タゴールが自らの不登校という経験から人間的な教育の大切さを痛感したこと、そして、そのような彼の考え

方が世界的な詩人誕生のきっかけとなっただけでなく、近代の学校教育制度とは別の価値観に支えられた教育観の基盤となったことを解明した。また、このような幼・少年期を経て、タゴールが宗教改革運動およびベンガルの農村改革運動に取り組み、その献身と挫折から人間教育への視座を導き出したことを明らかにした。

第2章では、「ユニティの教育」の思想的基盤について考察を加えた。一点目に、タゴールのレトリックの特徴や彼の表現から、彼の思想が対話的であること、また、宗教から強い影響を受けていることを明らかにした。二点目として、タゴールの人間観を「完全性を求める精神的存在」という言葉から読み解き、彼が人間の成長・発達を「ヒューマニティ」の確立と「人間の尊厳」を基調とする平和主義の宣揚に求めたことを解明した。そして、人間は想像力を用い、「愛の無限性」や「生命の永遠性」を感得することによって、自らの生を創り上げていくこと、また、人間は「自己放擲」という自己の主体的・積極的な部分的放棄によって自己の完成や自己実現を成し遂げる、という人間観を解明した。さらに、「生の哲学」を意味するジボン・ドルシヨンというベンガル語から、彼の人間観が「生」への積極的な洞察によって成り立ち、「生の充実」や「生の成就」を目的とする動的な人間観である、と解釈した。三点目に、タゴールの宗教観が、まず、「普遍的人間」という人間的なイメージに基づいていること、次に、「愛」と「叡智」という精神性によって、宗教を観念的にではなく実践的に表現し得るものであること、さらに、人間の成長や発達が「人間のための宗教」を創り上げていくという人間的な視点から捉えられていることを明らかにした。

第3章では、「ユニティの教育」を「生の全体

性を育む」ための理論枠組みとして解釈することを試みた。まず、「タゴール学園」における教育実践を弘中和彦の分析やアマルティア・センの証言から考察することによって、「タゴール学園」の教育が、「共生」、「寛容」、「体験」、「協同」、「創造」という5つの原理が相互に関連し合いながら調和と融合を成し遂げ、具体的な活動を支えるものである、と解釈した。次に、「ユニティの教育」は、タゴールの人間の生をトータルに捉える人間観に基づき、「人間の生の全体性を育む」ことを目指して行われているものであること、そして、それを実現するためには、「成長の自由の保障」と「調和と融合の実現」という2つの視座が必要であることを明らかにした。

### 3. 研究の成果と課題

以上のような考察を踏まえると、「ユニティの教育」は多義的な価値を除外することなく含みこみ、体験を重視する「成長の自由の保障」の教育であり、また「調和と融合の実現」という視座を有する教育の全体性を重視した教育であったと捉えることができ、それゆえ、これらのことは現代学校教育を根本的に見直すための理論枠組みであるということが出来る。

なお、今後の研究課題として次の2点をあげておきたい。

①「生の全体性を育む」という視座形成のためには、「ユニティの教育」から抽出した、「共生」、「寛容」、「体験」、「協同」、「創造」という5つの原理と「生の全体性」を支える「成長の自由の保障」と「調和と融合の実現」という2つの視座の関係構造を明確にする必要がある。

②「生の全体性を育む」ためには、学校現場において、どのようなカリキュラム編成が求められるかについての実践的な研究を積み重ねる必要がある。